を思入たるけしきあらはにて、玄めりかへりてぞ見へける、〇下略

〔増鏡十三秋の深山〕右大臣殿の御父君前關白殿家平、御なやみおもくなり給ひて、御ぐしおろす、〇中略中比よりは男をのみかたはらにふせ給ひて、法師の兒のやうにかたらひ給ひつゝ、ひとわたりつゝいとはなやかにときめかし給ふ事けしからざりき、左兵衛督忠朝といふ人も、かぎりなく御おぼえにて、七八年が程いとめでたかりし、時すぎてそのゝちは、成定といふ諸大夫いみじかりき、このごろは又隱岐守頼基といふも童なりしほどよりいたくまどはし給ひて、きのふけふまでの御めしうどなれば、御ぐしおろすにも、やがて御供つかうまつりけり、病おもらせ給ふ程も夜晝御かたはらはなたずつかはせ給ふ、すでにかぎりになり給へるとき、この入道も御うしろにさぶらふによりかゝりながら、きと御らんじかへして、あはれもろともにいでゆく道ならば、うれしかりなむとのたまひもはてぬに、御いきとまりぬ、右大臣殿も御前にさぶらはせ給ふ、かくいみじき御氣色にてはて給ひぬるを、心うしとおぼされけり、さてそのゝちかの頼基入道もやみつきて、あと枕もしらずまどひながら、つねは人にかしこまるけしきにて、衣ひきかけなどしつゝ、やがてまゐり侍る〳〵と、ひとりごちつゝ、程なくうせぬ、

〔續詞花和歌集十戀三〕かたらひけるわらはを怨みて、玄ば〳〵とはず侍けるに、彼童文をおこせて

侍けるに、薄墨にてかきたりければ、　僧都覺基

うす墨にかくにて知ぬ君はさは見えぬをよしと思ふ成べし

〔鹽尻七〕一文明の比、或人他國に行事侍りし、年比らうたく思ひ侍りし童の、やまふに煩ひて、殘り侍りしが、送りの詩に、

君去往二他鄕一、吾今臥二病床一、訃音如露來、莫惜一炷香、

となん云ける、客中に彼童はかなくなりしかば、再び人に交はらずして、修行しけるとかや、哀れ